

淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワークの活動 2016

内藤 馨・上原 一彦（大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター）、
鶴田 哲也（大阪産業大学人間環境学部）、綾 史郎（大阪工業大学工学部）、
高田 昌彦（琵琶湖を戻す会）

2012年に開始された「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク」（以下イタセンネット）による淀川城北ワンド群の外来魚駆除活動は、2016年で5年目となりました。この間、イタセンネットの保全活動等の外来魚駆除効果が確認され、2013年10月には、念願であった市民の手によるイタセンパラの放流が行われました。2014年から2016年にかけてイタセンパラの稚魚が確認され、ほぼ野生復帰が成功といえる段階にまでこぎつけています。

2016年は、これまでの城北ワンド群の環境保全活動とともに、少し上流の庭窪ワンド群に範囲を広げ駆除活動を開始し、新たにイタセンパラの野生復帰を目指しているところです。また、城北ワンド群での外来魚駆除釣り大会の開催、外来種対策勉強会や成果発表会、及び生物多様性関連イベントでの普及啓発活動等を行いました。2012年から継続して実施している城北ワンド群での地曳網による外来魚駆除と魚類相調査の結果は、2012年から順調に減少してきたブルーギルの推定生息尾数が、2015年の460尾から2016年は16,270尾に大幅に増加しました。特に当歳魚の増加が著しくなりましたが、この原因ははっきりとはわかりません。また、オオクチバスは生息尾数に大きな変動はみられませんでした。一方、在来魚は、ヨドゼゼラ、モツゴ、タモロコ属（タモロコ・ホンモロコ）、カネヒラ、オイカワ等が魚類組成の上位を占めていました。イタセンパラは、微増ではあるが順調に回復しています。城北ワンド群では在来魚が順調に回復してきているところですが、著しい外来魚の急増現象に今後も注意していくとともに、台風などによる一時的な増水による外来魚の流入に備えていくなど、今後も外来魚の駆除を継続して実施していく必要があります。庭窪ワンド群の方は、確認された在来魚種数は城北ワンド群と大きな差はみられませんが、外来魚の個体数が多く、これからも駆除を続け在来魚の生息環境を整えていく必要があります。城北ワンド群と同様、庭窪ワンド群の方でもブルーギル当歳魚の急増現象がみられました。

イタセンネットの活動は、10月に国連生物多様性の10年日本委員会の連携事業に認定され、国際自然保護連合日本委員会の「にじゅうまるプロジェクト」にも登録されました。地域の希少生物を保護するのみならず、生物多様性ホットスポットとしての淀川流域の環境保全に根ざした文化的な活動になることが期待されます。